

*King Henry V*における  
Shakespeareの死生観

Shakespeare's Ideas of the Afterlife in *King Henry V*

山畑 淳子

YAMAHATA Atsuko

# *King Henry V*における Shakespeareの死生観

## Shakespeare's Ideas of the Afterlife in *King Henry V*

山畑 淳子

YAMAHATA Atsuko

**Abstract:** In *King Henry V*, life and death, and determination to go to war are explored throughout the play. In Act 4, scene 1, on the eve of the Battle of Agincourt, the King's incognito dialogues with soldiers about fear of death, his meditation on the difficulties of kingship, and his readiness for death in the battlefield are depicted in detail. In the last play of Shakespeare's second tetralogy, the dramatist probes ideas of the afterlife.

The purpose of this paper is to consider Shakespeare's ideas of the afterlife in *King Henry V*. Through a careful examination of the structure and an analysis of the imagery and concepts of death found in the play, this paper discusses Shakespeare's thoughts about the afterlife in the flow of his dramaturgy.

キーワード：シェイクスピア、死生観、歴史劇、悲劇、ヘンリー5世

### 1. はじめに

Henry 5世は万民に愛されたイギリスの理想の君主であるとされているが、*King Henry V*の冒頭部分でコーラス役が勇猛果敢なHenry 5世が軍神マルスの姿で現れたことを印象付けた後、第1幕第1場におけるCanterburyの台詞によって、前王の死により皇太子が変容し、神々しい精神に包まれたことが語られている。<sup>1</sup> また、アジンコートの戦い前夜では、Erpinghamのマントを借りたお忍び姿の王がテントを回り、死を覚悟した王と臣下が劣勢の中での戦争の意義や死

の覚悟、王の責任について議論するが、こうした場面では死生観に関わる台詞や王の在り方、君主論、為政者論も語られており、この劇の根幹に関わると考えられる。さらに、作品の中では、王の反逆者の死の直前の心境や、アジンコート戦を前にした王の祈りの場及びイギリス軍だけでなく、フランス軍の死生観に関わる台詞も多く語られている。こうした台詞に注意して、この作品の中で表される死生観について見ていくことは、この作品のドラマツルギーやこの作品以降の作劇術の流れや作者の意識の根幹に関わる主張を探っていくことにつながると考えられる。

この作品はEssex伯爵の 아일랜드 遠征とその失敗による処刑から1599年春から初夏頃の創作と推定されているが、それはちょうどArden版の解説にもあるように宮内大臣一座が劇場座の家主ともめた後、1598年12月28日にこの劇場を解体して資材を船でテムズ川を超えてサザークのバンクサイドにグローブ座を建設した頃直後の作品であるため、歴史劇第2・4部作の最後の作品として、Shakespeareのドラマツルギーの発展にとって重要な位置を占める劇作であると考えられる。<sup>2</sup> 台詞の中からCaesarに喩えたHenry 5世の凱旋の様子から、グローブ座で初演されたことが分かっているJulius Caesarの構想をShakespeareがこの作品の終わりで考えていたとみなされており、こうした点はShakespeareのドラマツルギーの発展を考える上で非常に興味深い視点を与えるものである。こうした特徴と劇作術を作品の内面を中心に見てゆくのが本稿の目的である。まず、この作品に現れる代表的な死生観を、作品中の台詞や構造分析の重要な個所から取り上げ、さらにこの作品中に表象される死生観がHenry 5世の演じるパフォーマンスにどのような影響を与えているかを考察してゆきたい。そして、この作品におけるShakespeareの死生観がどのようなものであり、それは作品の中でどのような意味を持つものであるのかを考察してゆきたい。

## 2. 本論

### 2.1 Henry 5世の豹変とサリカ法

まず、導入部で述べた父王の死によるHenry 5世の豹変箇所と、英仏の戦争の大義ともなるサリカ法とこれに関わる死生観を現す台詞について見ていこう。まず、第1幕第1場で、Canterbury大司教とElyの司教は、王宮控えの間で、教会の領地を没収する法案が議会で提出されそうな気配について触れた後、次のようにHenryの豹変ぶりについて語っている。

CANTERBURY

The King is full of the grace and fair regard.

ERY

And a true lover of the holy Church.

CANTERBURY

The courses of his youth promised it not.  
The breath no sooner left his father's body  
But that his wildness, mortified in him,  
Seemed to die too; yea, at that very moment  
Consideration like an angel came  
And whipped th'offending Adam out of him,  
Leaving his body as a paradise  
T'envelop and contain celestial spirits.  
Never was such a sudden scholar made,  
Never came reformation in a flood  
With such a heady currence scouring faults,  
Nor never Hydra-headed wilfulness  
So soon did lose his seat, and all at once,  
As in this king.

ELY

We are blessed in the change.

CANTERBURY

Hear him but reason in divinity  
And, all-admiring, with an inward wish  
You would desire the King were made a prelate.  
Hear him debate of commonwealth affairs,  
You would say it hath been all in all his study.  
List his discourse of war, and you shall hear  
A fearful battle rendered you in music.  
Turn him to any cause of policy,  
The Gordian knot of it he will unloose,  
Familiar as his garter, that when he speaks,  
The air, a chartered libertime, is still,  
And the mute wonder lurketh in men's ears  
To steal his sweet and honeyed sentences.  
So that the art and practice part of life  
Must be the mistress to this theoretic: (1. 1. 22-52)

Canterbury大司教の表現によると王の若い頃の行状からは思いもよらなかったが、父君が息を引き取られると同時にHenry 5世の放埒なご気性も息を止められ、死んでしまったと述べられて

いる。Henry 4世崩御の瞬間、自省の念が天使のように現れ、陛下から罪深いAdamの本能をたたき出し、あのように突然英知を身に着けた学者が誕生したことはなかったし、あのようにたちまち、改悛の情が満ち溢れ、逆巻く怒濤となって悪徳を押し流したこともなかったと語られている。Elyの司教の述べる陛下の豹変は教会領没収を気にする自分たちにとって都合がよいという意見を受けてCanterbury大司教は陛下が神学について話されるのを耳にすれば、聖職者になられたらよかったのにと思わずにはいられないことや、陛下が国事について論じられるのを耳にすれば、日夜研究されていることを指摘し、戦争の話も陛下の口から語られると、すさまじい戦闘さえ美しい音楽と聞こえるほどの君主のカリスマ性を印象づけている。この箇所では、まるでHamletやCaesarさながら、学者、政治家、弁論家の側面を持った、学識と理性を兼ね備えた望ましい君主の姿が印象づけられている。教会領没収の法案についての王の立場を気にするElyの司教に対してCanterbury大司教は、次のようにElyの司教と話を進めているが、議会の教会領没収に対抗すべく画策する聖職者の進言が何故冒頭から多くの比重を置いて載せられているのかについては、まとめのところで述べることにする。

CANTERBURY                      He seems indifferent,  
Or rather swaying more upon our part  
Than cherishing th' exhibitors against us.  
For I have made an offer to his majesty,  
Upon our spiritual convocation,  
And in regard of causes now in hand  
Which I have opened to his grace at large,  
As touching France, to give a greater sum  
Than ever at one time the clergy yet  
Did to his predecessors part withal.

ELY  
How did this offer seem received, my lord?

CANTERBURY  
With good acceptance of his majesty,  
Save that there was not time enough to hear,  
As I perceived his grace would fain have done,  
That severals and unhidden passages  
Of his true titles to some certain dukedoms,  
And generally to the crown and seat of France,  
Derived from Edward, his great-grandfather. (1. 1. 72-89)

Canterbury大司教のフランス問題における多額の寄付についてHenry 5世が快く受けたので、新王は教会に対して好意的であろうと大司教は述べ、陛下の曾祖父にあたるEdward 3世より受け継がれたフランス王権に対するもろもろの権利について王が聞きたい様子であったことが語られ、ここにサリカ法への言及が暗になされている。Henry 5世のフランス王権への主張は、Edward 2世の王妃Isabella、つまりEdward 3世の母がフランス王Philip 3世の曾孫であり、Philip 4世の孫である事実に由来している。<sup>3</sup> まとめると、父君の崩御によって、王位についた瞬間に若いころの悪癖を洗い落として豹変し、神学者として、国事にも詳しく、弁の立つ理想の君主として登場したHenry 5世がフランス王権へとサリカ法への興味を示し、折しも戦争への足掛かりとなる多大な寄付を聖職者から受け、教会の守護神として、教会側に立っていることが、教会領について懸念している司教から語られているという伏線となっている。理想の君主としての豹変後の新王の登場には、“It must be so, for miracles are ceased, / And therefore we must needs admit the means / How things are perfected.” (1. 1. 67-69) とCanterbury大司教が述べている。ここでの“means” (1. 68) はArden版の注では“natural causes”であり、物事が成就するにはそれなりの理由があることが示唆されていて、父の死と引き継いだ王権に対する深い重荷の意識があることが、後の台詞からも分析できると言えよう。<sup>4</sup>

併せてこの時、フランスの使節団が謁見を願い出ていることが語られているが、王はフランス使節団に対応するためにも、サリカ法に対するイギリス国王としての認識を確認するために、この法律に対する議論が第1幕第2場で展開されている。Henry 5世はCanterbury大司教に次のように問題の核心について問いただしている。

My learned lord, we pray you to proceed  
And justly and religiously unfold  
Why the law Salic that they have in France  
Or should or should not bar us in our claim. (1. 2. 9-12)

For God doth know how many now in health  
Shall drop their blood in approbation  
Of what your reverence shall incite us to.  
Therefore take heed how you impawn our person,  
How you awake our sleeping sword of war:  
We charge you in the name of God take heed. (1. 2. 18-23)

サリカ法自体に女性の継承権を退けるはっきりした条項があるわけではないが、Henry 5世の曾祖父Edward 3世に由来した女系によるフランス王位継承権のイギリス側の要求に対抗するために取られた解釈であり、王はこの法律の正当性に大いに疑念を感じている。<sup>5</sup>そして、王は国の進退や多くの者の健康な生活、人々の生死の危険の全ての責任と決定の根拠を神がもとよりご存じの大司教の言葉次第としており、全ての戦争責任の根拠を大司教の言説に置いており、王のあらゆる意味での狡猾さや政治的に卓越したバランス感覚がこの台詞に読み取れると言えよう。これに対して、Canterbury大司教は次のように持論を展開している。

#### CANTERBURY

Then hear me, gracious sovereign, and peers  
That owe your selves, your lives and services  
To this imperial throne. There is no bar  
To make against your highness' claim to France  
But this which they produce from Pharamond:  
*In terram Salican mulieres ne succedant,*  
'No woman shall succeed in Salic land':  
Which Salic land the French unjustly gloze  
To be the realm of France, and Pharamond  
The founder of this law and female bar.  
Yet their own authors faithfully affirm  
That the land Salic is in Germany,  
Between the floods of Sala and of Elbe,  
Where Charles the Great, having subdued the Saxons,  
There left behind and settled certain French,  
Who, holding in disdain the German women  
For some dishonest manners of their life,  
Established then this law, to wit, no female  
Should be inheritrix in Salic land;  
Which Salic (as I said, 'twixt Elbe and Sala)  
Is at this day in Germany called Meissen.  
Then doth it well appear the Salic law  
Was not devised for the realm of France. (1. 2. 33-55)

Pharamondはフランク王国サリカ支族の伝説上の王であるが、このPharamond王から伝わる条文「サリカの地にて女子は相続するを得ず」をフランス人は不当にもフランス領とみなし、Pharamond王を女子の王位継承権を禁じた法律の制定者としているが、この法の起草者たちは

サリカ国がドイツ領内のエルベ川とザール川の間にあると述べているため、サリカ法はフランス王国のために制定されたのではないことは明々白々であり、英国王のフランス王位への要求を阻むものは何もないとCanterbury大司教は主張している。<sup>6</sup>

さらに、Canterbury大司教は次のように自説を力説している。

CANTERBURY

....

So that, as clear as is the summer's sun,  
King Pepin's title, and Hugh Capet's claim,  
King Louis his satisfaction, all appear  
To hold in right and title of the female.  
So do the kings of France unto this day,  
Howbeit they would hold up this Salic law  
To bar your highness claiming from the female,  
And rather choose to hide them in a net  
Than amply to embare their crooked titles  
Usurped from you and your progenitors

KING

May I with right and conscience make this claim?

CANTERBURY

The sin upon my head, dread sovereign:  
For in the Book of Numbers is it writ,  
'When the man dies, let the inheritance  
Descend unto the daughter.' Gracious lord,  
Stand for your own, unwind your bloody flag,  
Look back into your mighty ancestors. (1. 2. 86-102)

この持論に対する責任の所在として、大司教は王が良心に恥じることなくこの権利を要求できないのであれば罪が頭上に降りかかりますようにと述べている。歴代のフランス王も自らは女系の相続を血統や王位への正当性の根拠にしているのにもかかわらず、彼らはこのサリカ法を盾にとって英国王の女系による王位継承権の要求を阻もうとしていることが強調され、陛下及び陛下の祖先から篡奪した不正な称号を白日の下にさらすよりは、詭弁を弄してごまかそうとしていることを大司教は指摘している。さらにCanterbury大司教は旧約聖書の「民数記」をも引用して、女系による相続の正当性を主張し、正当な権利のために立ち上がり、血染めの旗を広げることが推奨して、聖書に基づいた王の宗教的、政治的意向と立場を同じにし、それを後押しし、自らの節を裏書きしている。<sup>7</sup>



Henry 5世が心の拠り所とする博識なる大司教の神学説により、サリカ法が彼のフランス王権への主張を阻むものでないことが確認され、当時聖職者は神の意思の伝達者とみなされていたため、この法的根拠と宗教性、さらに愛国心とそれを支える財力が基盤となり、死生観も含めたこの劇の軸・原動力となってプロットが進んでいく枠組みがここで提示されていると言えよう。しかし、冒頭のこの愛国的な枠組み、構造がまさにその通りに機能しているかは、台詞の中から検証していかねばならない。そして、こうした法的論拠と神学的議論がHenry 5世のフランス遠征への行動を決定させ、こうした色調や傾向が悲劇作品をも含めたShakespeareのこれ以降のドラマツルギーの軸となっていく傾向が見られると考えられる。

## 2.2 フランス戦への覚悟

フランス使節との交渉に当たるに際し、その覚悟としてElyの司教は“Awake remembrance of these valiant dead [Edward III and the Black Prince], / And with your puissant arm renew their feats.” (1. 2. 115-16) と王に進言しているし、Canterbury大司教は次のように述べている。

Go, my dead lord, to your great-grandsire's tomb,  
From whom you claim; invoke his warlike spirit,  
And your great-uncle's, Edward the Black Prince,  
Who on the French ground played a tragedy,  
Making defeat on the full power of France,  
Whiles his most mighty father on a hill  
Stood smiling to behold his lion's whelp  
Forge in blood of French nobility. (1. 2. 103-110)

2人の司教はEdward 3世と黒太子の霊廟に詣で、武勇の加護を祈願するように王に促しており、ここに為政者として、武勇の側面も示す必要があることを王に認識させているとともに、観客にも王の武力や戦術に秀でた血統を印象づけている。さらに、Elyの司教の台詞にあるように、名誉ある武勇は死と隣り合わせであることを観客に示し、Henry 5世の信奉する死生観が*Antony and Cleopatra*のAntonyの名声、偉業が未来永劫に残ることを重視する死生観に類似していることを示していると言えよう。<sup>8</sup> これは後にHenry 5世が戦場での祈りの中で展開する彼の死生観の伏線になっていると考えられる。さらに廷臣Westmorlandは“They [Your brother kings and monarchs of the earth] know your grace hath cause, and means, and might; / So doth your highness.” (1. 2. 125-26) と述べているが、この台詞によってHenry 5世の大義、財力、武力が備

わっていることを改めて観客に強調している。さらに、Henry 5世はフランス侵攻にあたり、次のように警告を発している。

We must not only arm t'invade the French,  
But lay down our proportions to defend  
Against the Scot, who will make road upon us  
With all advantages. (1. 2. 136-39)

Henry 5世はここで、国際感覚の優れた見通しを示しており、フランスだけでなく、この機会に乗じてスコットランドがイギリスを攻撃しかねない危機感をも察知している。王が雄弁性、神学的知識だけでなく、政治的な判断力にも優れていることがこの台詞の中では示されている。そして思慮深い頭脳は本国で自衛する必要があるためCanterbury大司教の進言により、王は四分の一の兵力を率いてフランスへ侵攻することとなる。

フランス皇太子の使者を呼び入れるにあたり、Henry 5世は次のような死生観も含めた言葉を吐露している。

Now are we well resolved; and by God's help  
And yours, the noble sinews of our power,  
France being ours, we'll bend it to our awe  
Or break it all to pieces. Or there we'll sit,  
Ruling in large and ample empery  
O'er France and all her almost kingly dukedoms,  
Or lay these bones in an unworthy urn,  
Tombless, with no remembrance over them.  
Either our history shall with full mouth  
Speak freely of our acts, or else our grave  
Like Turkish mute shall have a tongueless mouth,  
Not worshipped with a waxen epitaph. (1. 2. 223-234)

女系の血筋からこの国を自らのものであると法的、神学的論拠により確信している王は、フランスを絶対的支配力のもとに統治するか、さもなければこの身は粗末な壺に入れられ、墓石も墓碑銘もなく打ち捨てられるかのどちらかであると、戦場に向かう前に死を覚悟した思いをその台詞に表している。王たる者の宿命を、死生観を現す台詞の中に述べている。さらに、フランス及びフランスに帰属する王国に等しい公爵領を、絶対的統治権を使い配下に置くことを考えており、

この作品は背景としては中世であるが、中世からルネサンスに向かう時期の絶対君主出現の過渡期にある作品であると考えられる。また、この引用箇所台詞はRichard 2世の哀れな最期を彷彿とさせる台詞であり、王は幼少期から自らの父よりもRichard 2世に気に入られ、心情的に近い立場にあり、Richard 2世に父親が犯した国王弑逆の罪の意識や正統の王位継承者としての不安定な気持ちも、一か八かのフランス戦で一旗揚げて自ら正当性を立証したい王の気持ちに繋がっているとも考えられる。

王がフランス側に曾祖父Edward 3世の権利と称して要求した公爵領への返答として、フランス皇太子からのテニスボールの入った宝箱の侮蔑的な贈り物に対してHenry 5世は “When we have matched our rackets to these balls / We will in France, by God’s grace, play a set / Shall strike his father’s crown into the hazard.” (1. 2. 262-64) と毅然と述べ、さらに次のように続けている。

And tell the pleasant Prince this mock of his  
Hath turned his balls to gun-stones, and his soul  
Shall stand sore charged for the wasteful vengeance  
That shall fly with them; for many a thousand widows  
Shall this his mock mock out of their dear husbands,  
Mock mothers from their sons, mock castles down,  
And some are yet ungotten and unborn  
That shall have cause to curse the Dauphin’s scorn.  
But this lies all within the will of God,  
To whom I do appeal, and in whose name  
Tell you the Dauphin I am coming on  
To venge me as I may, and to put forth  
My rightful hand in a well-hallowed cause.  
So get you hence in peace. And tell the Dauphin  
His jest will savour but of shallow wit  
When thousands weep more than did laugh at it. –  
Convey them with safe conduct. – Fare you well. (1. 2. 282-98)

Henry 5世は予めフランス侵攻を考えていたにもかかわらず、フランス皇太子の侮蔑によりやむを得ず両国の対戦が起こり、その結果多くの妻を愚弄して妻から夫を、母から息子を奪い、子孫は生まれず、城を破壊させられた者たちは皇太子の侮辱を呪う理由を見出すであろうと述べていて、この箇所でもHenryの戦略的な、他人に責任転嫁する一面を見ることができる。また、その

ように述べつつも、全ては神の御心にあるとして、キリスト教徒たる王として神の御名において進軍し、全力を尽くして復讐を遂げたうえ、聖なる大義を掲げ、正当な権利を手にするだろうと神に訴え、自らの行動の宗教的根拠も名言しており、これがこの作品の特徴の1つにもなっている。

さらに、同箇所ですべてのようにHenryの自己教育の目的についても述べている。

And we understand him [Dauphin] well,  
How he comes o'er us with our wilder days,  
Not measuring what use we made of them.  
We never valued this poor seat of England,  
And therefore living hence did give ourself  
To barbarous licence, as 'tis ever common  
That men are merriest when they are from home.  
But tell the Dauphin I will keep my state,  
Be like a king and show my sail of greatness,  
When I do rouse me in my throne of France.  
For that have I laid by my majesty  
And plodded like a man for working-days,  
But I will rise there with so full a glory  
That I will dazzle all the eyes of France,  
Yea, strike the Dauphin blind to look on us. (1. 2. 267-81)

Henryが本当に手に入れたかったものは、貧しいイングランドの王座ではなく、フランスの王座であり、フランスの王座に就くときは、満帆に風をはらませ、堂々たる王者の威厳を見せつけるためのものであることを述べている。そのため、無軌道だった時代に英国王座から離れ、荒くれた放蕩三昧に耽り、王としての威厳を隠し、汗まみれで働く一平民のように過ごしたことが語られている。Henry 5世がフランスの王座に昇れば、太陽の栄光に包まれ、そのためフランス中の目はくらみ、皇太子の目も潰れてHenryを仰ぎ見ることもできなくなると豪語しているが、ここに彼の放蕩三昧であった若かりし頃の無軌道の時代は実は王の身を隠して市井の様子を学んでいた自己教育の目的と実践であったことを表明している。イギリスの王位に興味を示さなかった理由としては、彼の父君のRichard 2世に対する国王弑逆の罪の意識を負っていることが挙げられるであろう。こうした王位に対する不信や不安から、自らの正当性を確立するためにも、Henry 5世にとって、フランス戦は必須の目的であり、放蕩息子の自己教育はその必要過程だったと考えられる。また、こうした点は王の在り方である君主論、及びそれらを含めた死生観にも

関わってくると考えられる。フランスとの開戦を決意した英国陣営は、大事業へと導きたもう神への祈りを基軸として、戦争に必要な軍資金ならびに軍隊を集め、英国側の公明正大な遠征が着々と進行するよう、各々誠心誠意頭を働かせて事に当たることを覚悟する。

### 2.3 王の反逆者たちの死生観

次に、王の反逆者たちの死生観について見ていくことにする。この転覆劇暴露の経緯としては、戦争直前に、イングランドの若者はこぞって火と燃え、功名心が彼らの胸中を支配し、キリスト教国の王の鑑たるHenryの後に続く様子や、武具職人が大繁盛している様子が語られている。「英国側の公明正大な遠征が着々と進行するよう、各々誠心誠意頭を働かせて事に当たる」という高邁な事業の下、戦時を利用してしっかり稼ぐ職人の様子も描写され、バランスの取れた構造になっている。

その直後、コーラスにより、次のように王の寵臣の謀反の経緯が観客に知らされている。

But see, thy fault France hath in thee found out,  
A nest of hollow bosoms, which he fills  
With treacherous crowns; and three corrupted men,  
One, Richard Earl of Cambridge, and the second,  
Henry Lord Scroop of Masham, and the third,  
Sir Thomas Grey, knight, of Northumberland,  
Have, for the guilt of France, – O guilt indeed! –  
Confirmed conspiracy with fearful France,  
And by their hands this grace of kings must die,  
If hell and treason hold their promises,  
Ere he take ship for France, and in Southampton. (2. 0. 20-30)

フランス王が籠絡した謀反人の一味は錚々たる血筋の貴族であり、この謀反は突然浮上し密かに謀られた様子が語られており、*Richard II*においてBullingbrookへのAumerleの謀反計略が細かに記されているのは対照的である。<sup>9</sup> コーラスによる提示以外にはこれまで一切触れられていなかった王の暗殺計画が唐突にここに導入されているのは何故なのであろうか。Cambridge伯爵Richardは*Richard II*におけるAumerleの弟であり、血筋の良さとBullingbrookに対してなされた計略からも奸計に因縁のある人物である。彼は結婚相手のEdward 3世の次男Clarence公爵Lionelのひ孫であるAnne Mortimerとの婚姻によりもうけた息子の王位継承権の要求をしている

が、この作品では王に光が当てられ反逆者側には脚光が浴びせられておらず、フランス側の提供するお金に目が眩んだことになっている。<sup>10</sup> Thomas GreyはWestmorlandの娘と結婚し、その弟はガーター勲章を受けている。<sup>11</sup> また、王が最も信頼をおいていたScroopは*Richard II*においてブリストルでBushy、Green、Wiltshire伯爵に処刑を告げたStephen Scroopの息子であり、今度はその息子が死刑の宣告を受けるはめになっており、皮肉な運命を感じさせる。この作品では彼らにこの事件やその起因について語る台詞はあまり許されていない構造になっているが、時勢が許せばBullingbrookのように王座に近づけた人物たちである。<sup>12</sup> コーラスは地獄と反逆が約束を果たせば王という名にふさわしいHenryは共謀者の手によりフランスへ船出する前にサウサンプトンで死ぬことになると観客に説明している。

王の反逆者の死生観が現れている第2幕第2場を見ると、サウサンプトンの会議室でExeter、Bedford、Westmorlandがこの3人の反逆者について話しあっているところに、王が反逆者たちと登場し、昨日、酒の飲みすぎで王を貶める暴言を吐いて逮捕された男を釈放しようと王が述べると、Scroopは他の2人同様に“*That’s mercy, but too much security. / Let him be punished, sovereign, lest example / Breed, by his sufferance, more of such a kind.*” (2. 2. 44-46) と、罪人をこのまま寛大に許せばそれが先例となり、後々この種の犯罪が増えるであろうという理由で反対するのを受けて、王は3人に留守を預かり政治を扱う委任任命書を渡すと見せかけて、彼らに逮捕状を渡している。逮捕状を見て顔色が変わり、“*I do confess my fault / And do submit me to your highness’ mercy.*” (2. 2. 76-77) と慈悲を王に求めるCambridgeに対して王は先ほどの泥酔者に対する厳しい3人の意見を逆手にとり、“*The mercy that was quick in us but late / By your own counsel is suppressed and killed:*” (2. 2. 79-80) と一切慈悲をかけず、慈悲がなくなったことを死のイメージで語っている。ここにも、王の一枚上手な弁の立つ策士的一面が現れている。特に最も信頼を置いて親しくしていたScroopに対して、王は落胆の度合いが大きく、“*’Tis so strange / That though the truth of it stands off as gross / As black on white, my eye will scarcely see it.*” (2. 2. 102-104) と、この事実が目が見るのを拒んでいる様子で描写し、さらに次のように激しく責め立て謀反計略者たちの心に訴えている。

O how hast thou with jealousy infected  
The sweetness of affianced! Show men dutiful?  
Why, so didst thou. Seem they grave and learned?  
Why, so didst thou. Come they of noble family?  
Why, so didst thou. Seem they religious?

Why, so didst thou. Or are they spare in diet,  
Free from gross passion or of mirth or anger,  
Constant in spirit, not swerving with the blood,  
Garnished and decked in modest complement,  
Not working with the eye without the ear,  
And but in purged judgement trusting neither?  
Such and so finely boulded didst thou seem:  
And thus thy fall hath left a kind of blot  
To mark the full-fraught man and best endued  
With some suspicion. I will weep for thee,  
For this revolt of thine, methinks, is like  
Another fall of man. — Their faults are open.  
Arrest them to the answer of the law,  
And God acquit them of their practices! (2. 2. 126-44)

Henryのこみ上げてくる怒りと謀反に対する聖書的な意味での人間の墮落に対する残念な気持ちは共謀者に罪の許しを与えない。王は罪状明白な3人に対し、法の名において処罰することを命じている。法と宗教がHenryの治世を支える2大柱であり、法と宗教はこの劇を支える枠組みにもなっている。これに対してScroopたちは自らの罪の意識と死生観を次のように表明している。

SCROOP

Our purpose God justly hath discovered,  
And I repent my fault more than my death,  
Which I beseech your highness to forgive,  
Although my body pay the price of it.

CAMBRIDGE

For me, the gold of France did not seduce,  
Although I did admit it as a motive  
The sooner to effect what I intended.  
But God be thanked for prevention,  
Which I in sufferance heartily will rejoice,  
Beseeching God and you to pardon me.

GREY

Never did faithful subject more rejoice  
At the discovery of most dangerous treason  
Than I do at this hour joy o'er myself,  
Prevented from a damned enterprise.  
My fault, but not my body, pardon, sovereign. (2. 2. 151-65)

この反逆者たちの最期の言葉は主に粉本であるHolinshedの年代記ではほとんど語られておらず、Shakespeareの創作である。<sup>13</sup> Scroopは神がこの企みを暴くべくして暴かれたことと、自分の死以上に罪を悔やむと述べ、罪の代価は身をもって支払うとも述べている。Cambridgeはフランスの金貨に誘惑されたのではなく、それは1つの理由ではあったが、王位転覆に対してかねてからの計画を早く実行したかったとだけ述べている。Cambridgeはこの計画を阻止された神に感謝を表明し、死の処罰を甘受し神と王に赦しを請うている。Greyも忌まわしい企みが阻止されたことを喜び、彼の罪の赦しを王に願っている。ここでは淡々とした赦しを請う台詞が言葉少なに表明されており、これに対する王の次の宣告と対照をなしている。

God quit you in his mercy! Hear your sentence.  
You have conspired against our royal person,  
Joined with an enemy proclaimed and fixed,  
And from his coffers  
Received the golden earnest of our death;  
Wherein you would have sold your king to slaughter,  
His princes and his peers to servitude,  
His subjects to oppression and contempt,  
And his whole kingdom into desolation.  
Touching our person seek we no revenge,  
But we our kingdom's safety must so tender,  
Whose ruin you have sought, that to her laws  
We do deliver you. Get ye therefore hence,  
Poor miserable wretches, to your death,  
The taste whereof God of his mercy give  
You patience to endure, and true repentance  
Of all your dear offences! – Bear them hence.  
[*Exeunt Cambridge, Scroop and Grey, guarded.*] (2. 2. 166-82)

Henryはまず自分ではなく、慈悲深い神がお前たちを赦しますようにと祈り、彼らが国王暗殺を企て、宣戦布告した敵と手を結び、王の死の手付金としてフランスの金貨を受け取ったことと、英国全土を廢墟と化そうとしたことを理論的に説明し、彼らが滅亡を図った英国の安全を最優先させなければならないため、いくら寵臣であろうとも、彼らを法の手引き渡し、死刑を宣告している。時代背景は中世ではあるが、賢明で政治能力、武力を兼ね備えた王の下に中央集権的法



治国家が形成されようとしている動きが認識できる作品であると考えられる。王は神が慈悲により彼らに苦しみに堪える力と重大な罪を悔いる心を与えるようにと彼らの極刑に対して王の中では最大限のねぎらいの言葉も儀礼として付け加えている。謀反者が警護されて退場すると、王はこの危険極まる謀反を神が明るみに出してくれたことを、王の行く手を阻む障害が出発前に取り払われたことを確信し、この遠征が皆にとっても王にとっても輝かしい栄誉となると予言して、この戦いは武運と幸運に恵まれることは疑いないと英軍の士気を高めている。さらに、兵力を神の御手に委ね、すみやかに遠征の途に就くことを宣言し、謀反という惨事を逆手に取り、フランス戦への幸運なる第一歩としている。そして、フランス王たらずんばイングランド王にあらざると王の核心の台詞を吐露している。

#### 2. 4 王と兵士の死生観の比較

次に王と兵士の死生観についての論争が扱われている第4幕を見ていくこととする。まず、第4幕第1場でコーラスはイギリス陣営の焦燥しきった様子を次のように述べている。

The poor condemned English,  
Like sacrifices, by their watchful fires  
Sit patiently and inly ruminate  
The morning's danger; and their gesture sad,  
Investing lank-lean cheeks and war-won coats,  
Presenteth them unto the gazing moon  
So many horrid ghosts. O now, who will behold  
The royal captain of this ruined band  
Walking from watch to watch, from tent to tent,  
Let him cry 'Praise and glory on his head!' (4. 0. 22-31)

コーラスは観客に情報を提供し、観客に劇のイメージを形成するが、アジンコート戦の直前の英国軍は、規模においてもフランス軍に劣り連戦で疲れ切っているため、死を刻印された祭壇の生け贄のように、夜通しかがり火の傍らに座り、翌朝の戦いの危険を心の中で繰り返し思い描いている。イギリス軍とフランス軍の兵数の差は、フランス軍は英軍に対し3倍から30倍と言われ、広大な平原をイナゴの群れのように埋め尽くしていたとも言われている。<sup>14</sup> イギリス軍のふさぎ込んだ様子はやせこけた頬や戦いにすり切れた外套と相まって、月光の下、ひとりひとりが恐ろしい亡霊と見まごうばかりの崩壊寸前の軍隊で、陣頭指揮を執る国王のテントを巡察する勇気あ

る行動をコーラスは前もって描写している。ここには、戦争に駆り出された英国軍の兵士の死生観漂う状況が、愛国心に満ち溢れたコーラスの格調高い台詞によって印象づけられている。

では、コーラスの語りの枠に対して、実際の台詞ではどうなのかを見てみよう。第4幕第1場アジンコートイングランド陣営で、HenryはGloucester公、Bedford公と出会い、次のように英軍の苦境について述べている。

Gloucester, 'tis true that we are in great danger;  
The greater therefore should our courage be. —  
God morrow, brother Bedford. God Almighty!  
There is some soul of goodness in things evil,  
Would men observingly distil it out:  
For our bad neighbour makes us early stirrers,  
Which is both healthful and good husbandry.  
Besides, they are our outward consciences  
And preachers to us all, admonishing  
That we should dress us fairly for our end.  
Thus may we gather honey from the weed  
And make a moral of the devil himself. (4. 1. 1-12)

王は打たれ強い特性を現し、大きな危機だからこそより大きな勇気を奮い起こさねばならないと述べ、邪悪なものの中にも何かしら良いものが含まれているので、注意深くそれを抽出すればよいのだと冷静に指南し、彼の軍指揮者としての資質を現している。さらに、悪い隣人のおかげで早起きし、そのおかげで健康になり、時間や物が節約できることを指摘し、悪い隣人は心の外にある良心であり、皆の説教師でもあり、最期の時を迎える準備をきちんとしておくと諭していると指摘し、この箇所にもHenryの聖書に基づいた逆説の死生観が表現されている。

Erpinghamが登場すると、王は彼に向かって次のように声をかけている。

'Tis good for men to love their present pains  
Upon example: so the spirit is eased,  
And when the mind is quickened, out of doubt  
The organs, though defunct and dead before,  
Break up their drowsy grave and newly move  
With casted slough and fresh legerity. (4. 1. 18-23)

今自分を襲う辛さを愛するのは良いことで、それによって、心の安らぎを得ることが出来ると王は述べ、心に活を入れれば、それまでだらけていた四肢五体はまどろみという墓石を打ち破り、気力も新たに生き生きと動き出すとHenryは死生観を語り、次にErpinghamから外套を借りてイギリス陣営を見回ることにする。Pistol、Fluellenに会い話をした後、見かけた3人の兵士のひとり、Batesが、“I think it be [the morning] ; but we have no great cause to desire the approach of day.” (4. 1. 88-89) と言い、これに対してWilliamsが “We see yonder the beginning of the day, / but I think we shall never see the end of it.” (4. 1. 90-91) と戦死を暗示し、ぼやくのを聞いて扮装姿の王は自らをThomas Erpinghamの指揮下の者という設定で議論をしかける。

WILLIAMS A good old commander and a most kind  
gentleman. I pray you, what thinks he of our estate?

KING Even as men wrecked upon a sand, that look to  
be washed off the nest tide.

BATES He hath not told his thought to the King?  
No, nor it is not meet he should. For though I  
speak it to you, I think the King is but a man, as I am:  
the violet smells to him as it doth to me; the element  
shows to him as it doth to me;…Therefore when  
he sees reason of fears as we do, his fears, out of doubt,  
be of the same relish as ours are. Yet, in reason, no man  
should possess him with any appearance of fear,  
lest he, by showing it, should dishearten his army.

BATES He may show what outward courage he will,  
but I believe, as cold a night as 'tis, he could wish  
himself in Thames up to the neck; and so I would  
he were, and I by him, at all adventures, so we were  
quit here.

KING By my troth, I will speak my conscience of the  
King. I think he would not wish himself anywhere  
but where he is.

BATES Then I would he were here alone; so should he  
be sure to be ransomed, and a many poor men's lives  
saved.

KING I dare say you love him not so ill to wish him  
here alone, however you speak this to feel other  
men's minds. Methinks I could not die anywhere so  
contented as in the King's company, his cause being

just and his quarrel honourable.  
WILLIAMS That's more than we know.  
BATES Ay, or more than we should seek after, for we  
know enough if we know we are the King's subjects. If  
is cause be wrong, our obedience to the King wipes  
he crime of it out of us. (4. 1. 96-133)

開戦前の状況は、浅瀬に乗り上げた難破船の乗組員同様、次の波で押し出されかねない状態であり、王だってひとり人間に過ぎないのだから、我々と同じように怖さを味わうが、王がそんな様子を見れば全軍の指揮が落ちるので誰ひとり王を怖気させてはならないことを率直に王が兵士に伝えると、Batesは王がどんな勇気を見せつけようと勝手だが、王だってこんな寒い晩にはテムズ川に首までつかってもロンドンに居たいにきまっているし、王には是非そうしてもらいたいという意見に王は今居るところ以外のどこにも居たいと思っていないと、王の気持ちを代弁するという設定で述べている。しかしBatesは当時戦場の多くの貴族がそうしていたように、王にひとりきりで捕虜になり、身代金を払って生きて帰れるのだし、それによって大勢の哀れな兵士の命が助かると主張する。王には大義名分があり、これは天下に恥じない戦いであることを王は力説するが、兵士たちには通じず、説得しきれていない。

さらに、王と兵士は次のように戦争の目的と兵士の命についての議論を展開している。

WILLIAMS I am afraid there are few die well that  
die in a battle, for how can they charitably dispose of  
anything when blood is their argument? Now if these  
men do not die well it will be a black matter for the  
King, that led them to it, who to disobey were against  
all proportion of subjection.

KING So if a son that is by his father sent about  
merchandise do sinfully miscarry upon the sea, the  
imputation of his wickedness, by your rule, should be  
imposed upon his father that sent him; or if a servant,  
under his master's command transporting a sum of  
money, be assailed by robbers and die in many irre-  
conciled iniquities, you may call the business of the  
master the author of the servant's damnation. But this  
is not so: the King is not bound to answer the particular  
endings of his soldiers; the father of his son, nor the

master of his servant; for they purpose not their death  
when they purpose their services. (4. 1. 141-58)

Williamは戦争の目的は殺し合いであり、兵士が懺悔もせずに死んだとなると、連中を戦地へ連れて行ったのは王であり、臣下は王に逆らえないのだから王にとっては真っ黒な罪であると力説している。これに対して王は父親の言いつけで商取引に出た息子が海難事故に遭い、懺悔のいとまもなく死んだ場合、息子の罪の責任は父親にあるとする喩えと、主人に言いつけられた使用人の死の場合、仕事が使用人を墮地獄に追い込んだ事例を挙げて、王は兵士ひとりひとりの最期に責任はないし、父親は息子の最期に、主人は使用人の最期に責任はないと説明している。

王は続けて次のように話を展開している。

War is his beadle, war is his  
vengeance; so that here men are punished for before  
breath of the King's laws in now the King's quarrel.  
Where they feared the death they have borne life away,  
and where they would be safe they perish. Then if  
they die unprovided, no more is the King guilty of their  
damnation than he was before guilty of those impieties  
for the which they are now visited. Every subject's  
duty is the King's, but every subject's soul is his  
own. Therefore should every soldier in the wars  
do as every sick man in his bed, wash every mote out  
of his conscience: and dying so, death is to him  
advantage; or not dying, the time was blessedly lost  
wherein such preparation was gained; and in him that  
escapes, it were not sin to think that, making God so  
free an offer, he let him outlive that day to see his  
greatness and to teach others how they should prepare. (4. 1. 168-84)

戦争は兵士らを鞭打つ神の警官であり、神の復讐であると王は述べている。従って彼らが懺悔を受けることもせずに死んだとしても、その魂が地獄に墮ちた責任は王のものではないとしている。これに対してWilliamsは“ 'Tis certain, every man that dies ill, the ill / upon his own head; the King is not to answer it.” (4. 1. 185-86) と述べているし、Batesも “I do not desire he should answer for me, and / yet I determine to fight lustily for him.” (4. 1. 187-88) と述べ、これに異は

唱えていないが、王がうまく説得出来ているかと言えば、詭弁を弄している感を免れないであろう。

同箇所ではさらに、従軍した全ての兵士は自分の良心の全ての汚れを洗い落としておかなければならないと述べている。そのように死ねば、死はその男の為になり、死ななくとも、心の準備を得るために費やされた時間は祝福され、その日を生き延びることを神がお許しになったのは、罪を後悔し、全てを神に委ねたからで、その目的は神の偉大さを明らかにし、いかにして死に備えるべきかを世の人々に知らしめるためだと王は説明している。この引用箇所はカルヴァン派のジュネーブ聖書及び主教訳聖書の新約聖書のピリピ人への手紙第1章第21節の「私にとって生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです」という1節の影響が見られる。<sup>15</sup> 王はこの箇所で中世キリスト教的死生観を信奉していることを現している。

王は捕虜になって身代金を払うつもりはないらしいという情報に対しWilliamsは、それは兵士に意気揚々と戦わせるためであり、兵士がいなくなれば身代金を払って自由の身になるかもしれないと揶揄するので、王はそれはあまりにもひどいのではないかと2人は目印となる帽子に着ける手袋を交換して、後で論争の決着をつける件となる。兵士と別れた後、王は黙想し、Erpinghamに皆を自分のテントに集めるよう指令を出した後で、次のように祈りを捧げている。

KING [*Kneels*.]

O God of battles, steel my soldiers' hearts;  
Possess them not with fear. Take from them now  
The sense of reckoning, if th'opposed numbers  
Pluck their hearts from them. Not today, O Lord,  
O not today, think not upon the fault  
My father made in compassing the crown.  
I Richard's body have interred new,  
And on it have bestowed more contrite tears  
Than from it issued forced drops of blood. (4. 1. 286-94)

Henry 5世は戦争直前に跪いて、数の上では断然有利なフランス軍の数により兵士たちの勇気を引き抜くことがないようにと神に祈り、この日だけは父君が王冠を手に入れるためにRichard 2世に対して犯した罪を忘れたまえと懇願している。そして、Richard 2世のご遺体を手厚く埋葬しなおし、痛恨の涙を流したことを告白し、罪を悔いて赦しを願っている。Henry 5世にとって、フランス戦を含む多くの行動の根源がこの引用箇所における父君の国王弑逆の罪の意識から発し

ていると考えられる。それ故、真摯に神に祈りを捧げた後、王は登場したGloucesterに向かって  
“I know thy errand, I will go with thee. / The day, my friends and all things stay for me.” (4.  
1. 303-304) と述べ、戦場に向かっている。

王は悲観的な気分が漂うイングランド陣営で、援軍を希望するWestmorlandに対して、次のように叱責している。

What's he that wishes so?  
My cousin Westmorland? No, my fair cousin:  
If we are marked to die, we are enough  
To do our country loss, and if to live,  
The fewer men, the greater share of honour.  
God's will, I pray thee wish not one man more.  
By Jove, I am not covetous for gold,  
Nor care I who doth feed upon my cost;  
It earns me not if men my garments wear:  
Such outward things dwell not in my desires.  
But if it be a sin to covet honour  
I am the most offending soul alive.  
No, faith, my coz, wish not a man from England.  
God's peace, I would not lose so great an honour  
As one man more, methinks, would share from me,  
For the best hope I have. O do not wish one more!  
Rather proclaim it, Westmorland, through my host,  
That he which hath no stomach to this fight,  
Let him depart; his passport shall be made  
And crowns for convoy put into his purse.  
We would not die in that man's company  
That fears his fellowship to die with us.  
This day is called the feast of Crispian.  
He that outlives this day and comes safe home  
Will stand a-tiptoe when this day is named  
And rouse him at the name of Crispian. (4. 3. 18-43)

王はまず、戦死する運命にあるなら、イングランドの損失は我々だけでたくさんで、それに従う  
という中世騎士道に裏打ちされた死生観を表明している。そして、彼には金銭欲はないが、名誉  
が後世に残ることを誰よりも望む、Antonyに似た死生観を表明している。魂の救いという最良

の希望と引き換えにしても、王は大きな名誉を失いたくはないと述べ、だから少数で大きな名誉を手にした方がよいので、援軍を望むなど逆説の説法でイギリス軍陣営にひとりでも踏みとどまるよう、士気を高めている。王は戦友として共に死ぬのを恐れるようなそんな男と一緒に死にたくはないと述べ、今日のCrispianの祭日を生き延び無事に帰国する者は、この日のことが話題になる度に背筋を伸ばし、奮い立つであろうと英軍を鼓舞している。

さらに、王は次のように全軍に語りかけている。

This story shall the good man teach his son,  
And Crispin Crispian shall ne'er go by  
From this day to the ending of the world  
But we in it shall be remembered,  
We few, we happy few, we band of brothers.  
For he today that sheds his blood with me  
Shall be my brother; be he ne'er so vile,  
This day shall gentle his condition.  
And gentlemen in England now abed  
Shall think themselves accused they were not here,  
And hold their manhoods cheap whiles any speaks  
That fought with us upon Saint Crispin's day. (4. 3. 56-67)

この箇所でも王は後世に名の残る名誉に裏打ちされた死生観を展開しており、英軍の指揮者として死を覚悟している。60行目で“*We band of brothers*”と述べ、同陣営に兄弟の一団としての我らという呼びかけで騎士道的団結を強め奮い立たせている。兵士にどれほど身分の卑しい者もこの日から貴族と同列になると諭し、王は巧妙に兵士の士気を上げている。王は数においては全く劣勢の状況にありながら、弱みを強みに変え、逆説の発想で兵士の心を一気に捉え、危機を乗り切っている。この演説により、劇の流れは逆転し、イギリス軍は勝利の道を歩んでいく。Henry 5世は兵士全員を鼓舞し、英軍に勇気を与え、一体感を共感させて勝利へと導く。王はこの箇所ですらでは起きず、不利を有利に変えていく戦略家としての一面を見せている。ここには、戦場の劣勢の中での悲壮感はなく、幸せな少数、名誉ある兄弟の一団としての、友愛の一員としての死生観が表現されており、ルネサンス期の作品ではあるが、愛国心に支えられた中世キリスト教的死生観が表象されている。そして、これらはHenry 5世の信奉する宗教観であり、死生観であり、そこにHenry 5世の人間性が投影されていると言うことができよう。



## 2.5 イギリス軍とフランス軍の死生観の対比

アジンコートでの戦いで大きな差が出たように、イギリス軍とフランス軍陣営の気質の差はどのようなもので、それが歴史に名を残すこの戦いでどのように働き、死生観の違いはどうであるのかを見てゆきたい。

第3幕第7場においてアジンコートでの陣営でフランス軍の貴族たちと皇太子は自分たちの武具甲冑や馬の自慢をしあって、言葉の応報となっている。皇太子は愛馬を“Wonder of nature!” (3.7.40) と讃えて、“for my horse is my mistress.” (3.7.43) と言い出す始末である。他の貴族も馬を恋人として例え、言葉のやり取り合戦となっており、こうしたことから皇太子の性格やフランス陣営の気風としては、名馬の自慢などの気取り、大言壮語と空威張り、気位の高さを示す特徴が見られる。夜明け前の開戦直前の陣営でフランス軍の貴族は次のように時を過ごしている。

RAMBURES Who will go to hazard with me for twenty  
prisoners?  
CONSTABLE You must first go yourself to hazard ere  
you have them.  
DAUPHIN 'Tis midnight; I'll go arm myself. *Exit.*  
ORLEANS The Dauphin longs for morning. (3.7.85-90)

フランス軍の貴族は連戦で疲れ切ったイギリス軍兵士を侮り、朝が待ち遠しく、その捕虜の数を賭けてダイスを振り、時を過ごす始末である。フランス軍がイギリス軍捕虜の数を賭けてダイスを振った記述はHolinshedからのものである。<sup>16</sup> イギリス軍陣営の切羽詰まった状況と比較すると、開戦前と思えない程、余裕で遊び心満載の優雅な時の過ごし方であり、こちらの軍隊の尊大な気質が見てとれる。Orleansは“It is now two o'clock; but, let me see, by ten / We shall have each a hundred Englishmen.” (3.7.155-56) と述べ、自信の程を示し、自軍敗北については露ほども考えてはいない。

第4幕第2場でフランス軍総司令官は、餓死寸前の敵軍を見て、各小隊にまわりついている馬丁や百姓を戦場から一掃するために、そうした者に英軍と対戦させるだけで事足りると考えるが、我々の名誉がそれを邪魔するとして、ごく少数の者で対戦を行い、万事片が付くと述べ、既に開戦しているのに悠長に戦略を練り、なかなか出陣しようとしなない。イギリス軍が身分の差なく、王の下にひとつに団結し、榮譽を得る幸せな少数としての確固たる意識を持っているのとは

対照的である。この箇所でも、兵数が多いことに力を得て、ゲームのような感覚で対戦しているフランス軍の気質が読み取れる。

第4幕第3場で司令官MontjoyがHenry王に身代金を払って捕虜になる意志があるかどうかを確認しにくるが、フランス軍の背景にあるのは、イギリス軍兵士の魂が安んじてこの戦場から去りうるように、あの世に行く前に全英軍の部下に懺悔を促すという従来のキリスト教的死生観である。さらに、Montjoyは兵士の死のイメージを“From off these fields where, wretches, their poor bodies / Must lie and fester.” (4. 3. 87-88) と語っているが、フランス軍の伝える死のイメージはこの台詞に見られるように、肉体が横たわり腐っていく、腐れ肉のイメージである。これに対してHenry 5世は次のように返答している。

The man that once did sell the lion's skin  
While the beast lived, was killed with hunting him.  
A many of our bodies shall no doubt  
Find native graves, upon the which, I trust,  
Shall witness live in brass of this day's work.  
And those that leave their valiant bones in France,  
Dying like men, though buried in your dunghills,  
They shall be famed, for there the sun shall greet them,  
And draw their honours reeking up to heaven,  
Leaving their earthly parts to choke your clime,  
The smell whereof shall breed a plague in France. (4. 3. 93-103)

But by the mass, our hearts are in the trim,  
And my poor soldiers tell me yet ere night  
They'll be in fresher robes, or they will pluck  
The gay new coats o'er the French soldiers' heads  
And turn them out of service. If they do this,  
As, if God please, they shall, my ransom then  
Will soon be levied. (4. 3. 115-20)

王はまず、ライオンが生きているうちにその皮を売った男はライオンを撃ちに行って殺されたという逸話を出して相手を制し、自分たちの体の多くは疑問の余地なく生き延びて英国に帰還し故郷の墓に埋葬され、この日の功績を刻んだ真鍮の板は墓石に嵌められ末永く残るにちがいないと宣言している。男らしく戦士した者はその勇敢な骨をフランスに残す者ですら、その名声は広ま

るだろうと述べているが、英国軍の死のイメージは確固とした骨であり、フランス軍の想起する腐肉よりもっと固く、志ある凜としたイメージである。この箇所では表象されているのは、榮譽ある語り継がれる死であり、Antonyの名誉ある死と一致している。加えて王の後半の台詞では、今みすばらしい姿の兵士もこの世では仮の姿で、天国で新しい服に着替えることができるという、来世での姿を真の姿とする中世的死生観が現れている。フランス軍の交渉にはイギリス軍への侮蔑が含まれているが、Henryはこれに対して伝令にフランス王の身代金の件でもう一度伝令が英国側に来るとどめを刺し、英軍の指揮をYorkに任せている。

第4幕第5場でフランス軍はいよいよ劣勢が明らかになり、皇太子は“*Mort de ma vie, all is confounded, all! / Mortal reproach and everlasting shame / Sits mocking in our plumes. O méchante Fortune!*” (4. 5. 3-5) と述べ、敗戦をわが命の死と呼び、運命の女神を邪悪なものとして誹り、致命的な屈辱と永遠の汚名が我々の兜の上に居座りあざ笑っていると表現している。退却の合図で逃げ行く兵士に皇太子は逃げるなど命じる始末である。続けてフランス軍上層部はこの劣勢について次のように述べている。

BOURBON

Shame, and eternal shame, nothing but shame!  
Let us die instant. Once more back again,  
And he that will not follow Bourbon now,  
Let him go home and with his cap in hand  
Like a base pandar hold the chamber-door  
Whilst by a slave no gentler than my dog  
His fairest daughter is contaminated.

CONSTABLE

Disorder, that hath spoiled us, friend us now!  
Let us on heaps go offer up our lives.

ORLEANS

We are enough yet living in the field  
To smother up the English in our throngs  
If any order might be thought upon.

BOURBON

The devil take order now! I'll to the throng.  
Let life be short, else shame will be too long. (4. 5. 10-23)

Bourbonは軍司令官同様これを永遠の恥としてもう一度前線に戻り、潔い死を考えてはいるが、

破れかぶれの精神状態で心情的にはPandarusに近いものであり、真摯な宗教心は持ち合わせていないと言えよう。Orleansは戦場には多くのフランス兵がいるのだから秩序を取り戻せば盛り返せると提案するが、Bourbonに秩序など悪魔にくれてやれと却下されている。フランス軍には大義もなければ、秩序も実態ある戦略もなく、真摯な信仰心もないのが、イギリス軍との相違として挙げられる。

英国軍の死生観としては、アジンコートで総指揮を執ったYorkの最期が好例と言えよう。第4幕第6場で王はYorkが三度倒れ、三度立ち上がり戦うのを見たと称賛しているし、Exeterは勇敢な軍人として、先に天に召されたSuffolkに対するYorkの最期を次のように語っている。Suffolkが先に死に、満身創痍のYorkは血に浸されて横たわるSuffolkに近寄り、髭をつかんで顔を起こすと傷に口づけして、一緒に天国に行くので自分の魂を待ち、それから並んで飛んで行くのだと語りかけたことが王に伝えられている。そして栄えある戦場で轡を並べ死力を尽くして戦ったことが強調されている。このような榮譽ある愛国的宗教観に裏打ちされた、後世に残る死生観がイギリス軍の死生観であって、フランス軍の観点と対照をなしていると言えよう。

### 3. この論考のまとめ

これまで、*King Henry V*に現れる代表的な死生観やHenry 5世を中心とした作品の登場人物に見られる死生観を見てきたが、劇構造を踏まえてHenry 5世の死生観及び死生学がどのようなもので、それがShakespeareの後の作品の作劇術にどのような影響を与えるのかについてもまとめてゆきたい。また、コーラスの役割についてもまとめのところで論じていくこととする。この劇におけるコーラスの役割は特異であり、その占める比重も多い。コーラスはそれぞれ明確な主題を持つ幕をつなぎあわせ、まるで絵巻物のように観客にこれらの歴史劇を提示していて、こうした場所や空間の移動も含むパジェントの要素を劇に盛り込んでいく手法は後期の劇でShakespeareが展開していくものでもあり、この劇はコーラスがこうしたレリーフのようなパジェントをつないで見せていく構成になっていると考えられる。また、Henry 5世は内面の葛藤と孤独を黙想や祈りの中で表象し、演劇のメタファーを使い、彼の死生学を表現していく方法をこの芝居は提供しているが、この傾向とコーラスの関係はどのようなのであろうか。

G. P. JonesはA. P. Rossiterがこの劇を高級将校と金管楽器部のために大いに編成された国家的統一に基づいたプロパガンダ劇と見ていることを挙げ、その金管楽器部はコーラスの声によって

主旋律が提供されているとしているが、果たしてそうであろうか。<sup>17</sup> また、Rossiterは戦時の価値観は視野の狭さを要求し、王は十分な人間性に到達していないと述べているが、王は兵士と語り、人間性も垣間見せてアジンコート戦前の演説で英軍に連帯感を持たせていたのではなかろうか。<sup>18</sup> 確かにコーラスは王やフランス戦に関する情報を観客の頭に刷り込んではいる。第4幕冒頭のコーラスによるアジンコートの戦いの概要説明のように、王の行動とコーラスの言説はつながっており、重層的効果をなしている。まずエピローグでコーラスは勇猛果敢なHenryが軍神Marsの姿で現れたことを予め観客に説明しており、この木造のO字型の劇場にアジンコートの空気を震え上がらせた無数の兜を詰め込むことができないでしょうかと観客に問い、それを切望している。そして観客の想像力に働きかけることに許しを得て、観客を取り巻くこの壁の中に強大な2つの王国が閉じ込められ、そそり立つ前線は危険な海峡によって引き裂かれていることを想像するようお願い、力及ばぬところは観客の想像力で補うよう頼んでいる。このようにコーラスは観客に直接語りかける言葉でもって観客と劇世界を繋ぎ、観客の想像力を誘導し、劇世界を構築する。さらに第2幕初めのコーラスの台詞に見られるように、必ずしもコーラスの高圧的な愛国主義に沿ったプロット通りに筋が進まない点を身分の低い登場人物がたくましい庶民の姿を表現することで一面的になりがちな構造にバランスを取っている。加えてコーラスは、第3幕初めで述べているように、Henry 5世を理想の君主として提示し、王への賛辞と愛国主義的高揚した表現でハーフラーを目指す王の艦隊の様子を高らかに表現している。第4幕冒頭でコーラスはアジンコートの戦い直前の劣勢のイングランド兵士たちが眼前の王の姿を見て演説を聞き、勇気と元気の源になる一体感ある様子を高らかに謳っているが、実際には王は詭弁を弄していて、兵士たちを説得しきれていない。この王の力量の曖昧さと弱さの提示、全てを背負わなければならない王の厳しい立場への苦悩は、“We must bear all. O hard condition, / Twin-born with greatness,”

(4. 1. 230-31) という王の黙想の言葉で表現されているが、こうした内面の吐露はHenryの死生観と相まって、HamletやTroilusなどのShakespeare後期の作品の登場人物の内面の苦悩へとつながっていく大切な要素であると考えられる。第5幕冒頭でコーラスは国王のロンドン凱旋の様子とフランスとの和平交渉のため再び国王がフランスへ赴くことを告げ、コーラスの役割は過ぎ去った過去と時の経過を知らせることであると、場所の移動だけでなく、時間の移動と結びつけを行えることを示している。コーラスは膨大な物語をリアルに再現することの不可能を認めるように観客に懇願している。エピローグで彼は、作者の代弁者として偉大な王の事績を小さな空間に閉じ込め、彼らの栄光を途切れがちな言葉で語ってきたことを謝し、短い間だが、わずかな時にイングランドの星、Henry 5世が偉大な生涯を全うしたこと、息子のHenry 6世は幼くして父

王の後を継ぎ、彼を取り巻く多くの者が政権を争い、ついにフランスを失い、イギリスにも血が流されたことを語り、この芝居も前作同様の支援を賜って引き下がり、Henry 5世の短い生涯と死生観を浮かび上がらせている。

全体の劇構想としてまとめると、Henry 5世のサリカ法への関心とサリカ法反論が正論としてこの劇の基盤となり、当時の知の総力であり、神の代弁者である聖職者の支持と財政的援助がこれを裏付け、Henry 5世の政権も支える構造となっている。Henry 5世のフランス王権への主張はサリカ法反論とCanterbury大司教の承認と推挙をもって進められ、そこに無軌道から豹変した理想の君主が愛国的高揚を特色としてプロットを進めていく構造になっている。Henry 5世はキリスト教徒たる王として登場し、苦境ながらもフランス戦を推し進めていく。劇冒頭の教会領の没収を気にする聖職者の意見が王国の方針を支配していく筋として導入されているのはHenry 5世が必ずしも愛国的英雄の側面だけでなく、彼がMachiavelli的政治家手腕を持っていることを示しているのではないかと考えられる。この作品の背景は中世であるが、中世からルネサンス期へ向かう絶対君主の中央集権国家出現の過渡期にある作品であり、君主論と相まって、逆説的ではあるが、君主の教育や死生観が取り扱われている。Henry 5世にとって英国王座の信憑性に対する確信のない自身の思いは、Richard 2世に対する父君による国王弑逆の罪の意識にあり、国王としての正当性を立証し、自信を得るためにも本当に手に入れたかったものはフランス王権であり、そのために市井から学んだ自己教育の目的が語られていたと考えられる。こうしたHenry 5世独特の在り方や君主論は王の死生観にも現れていて、作品の基調となっている。アジンコート戦の前夜の王の議論や演説はクライマックスとなり、劇的転換点となり、英軍を勝利に導いていると言えよう。王は演説の中で死生観を展開し、英軍をひとつにまとめ、連帯感を作り、王の人間性を兵士や観客にも垣間見せている。Bulloughはこの作品の中でShakespeareは叙事詩演劇の実験を行ったと見ているが、はたして正しい評価であろうか。<sup>19</sup> この作品の中に現れる議論の要素はグローブ座を見据えた今後の観客層の変化と後期の作品のドラマツルギーに関わっていくと考えられる。コーラスの説明と王の進めるプロットはリンクしているが、必ずしも合致しているわけではない。その筋書き通りにいかない隙間を身分の低い登場人物のたくまさがバランスを取る効果を発揮し、補っている。王は開戦前の黙想の場で、王という身分の重さと人間としての弱さをさらけ出している。王は死生観として、何よりも名誉が永遠に残ることを望む中世キリスト教的死生観を展開するが、自らの君主像からはみ出す内面の苦悩や王としての重みこそ、新しい劇場向けの特色であり、後期の作品とつながっていく要素であると考えられる。

注

1. 本稿での*King Henry V*の引用は全てT. W. Craik (ed.), *The Arden Shakespeare: King Henry V* (London: Routledge, 1995) を用いた。
2. Cf. Craik, pp. 3-5; Andrew Gurr(ed.), *The New Cambridge Shakespeare: King Henry V* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1992), p. 1; Lawrence Danson, "Henry V: King, Chorus, and Critics," *Shakespeare Quarterly*, 34 (1983), p. 27.
3. Cf. A. R. Humphreys(ed.), *New Penguin Shakespeare: Henry V* (London: Penguin Books, 1968), p. 23.
4. Cf. Craik, p. 127, notes l. 68.
5. Cf. Craik, pp. 131-32, notes ll. 33-95; Gurr, *The New Cambridge Shakespeare: King Henry V*, pp. 18-20, 77, notes l. 11; Geoffrey Bullough(ed.), *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* (London: Routledge and Kegan Paul, 1962), IV, pp. 378-79.
6. Cf. Craik, p. 132, notes. l. 37; Bullough, p. 378. この箇所についてもShakespeareは多くをHolinshedに負っている。
7. Cf. Craik, p. 136, notes ll. 98-101; Bullough, p. 389. 原典はHolinshedからである。
8. Cf. 拙論「*Hamlet*と*Antony and Cleopatra*におけるShakespeareの死生観」『埼玉女子短期大学研究紀要』第28号, 埼玉女子短期大学, 2013年9月, pp. 75-76.
9. Cf. *King Richard II*との比較参照にはAndrew Gurr (ed.), *The New Cambridge Shakespeare King Richard II* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1984) を用いた。
10. Cf. Craik, p. 154, notes l. 23.
11. Cf. Craik, p. 154, notes l. 25.
12. Cf. Craik, p. 154, notes l. 24.
13. Cf. Craik, p. 178, notes ll. 161-82; Bullough, pp. 383-85.
14. Cf. Frank Taylor and John S. Roskell(trans.), *Gesta Henrici Quinti: The Deeds of Henry the Fifth* (Oxford: Clarendon Press, 1975), p. 77.
15. Cf. Humphreys, p. 202, notes l. 175.
16. Cf. Craik, p. 254, notes ll. 17-19 ; Bullough, pp. 391-94.
17. G. P. Jones, "Henry V: The Chorus and the Audience," *Shakespeare Survey*, 31(1978), p. 93; A. P. Rossiter, *Angel with Horns and other Shakespeare Lectures* (London: Longmans, 1961), p. 57.

18. Cf. Rossiter, p. 58.
19. Cf. Bullough, pp. 349-51.